

— 不借身命(ふしやくしんみょう)なり、但借身命(たんじやくしんみょう)なり —

◇山本有三の長編小説『ふしやくしんみょう』(旺文社文庫)を読んで、人から注意や批判をされたとき、謙虚に耳を傾けることのできるのは、己の心がどういう状態のときだと思えますか?ご自身の意見を原稿用紙八〇〇字にしてまとめてみましょう。

十蔵じゅうざうは、心ひそかに、「いくさがあればいいと思っていた。いくさがはじまれば「不借身命ふしやくしんみょう」のさし物をさして出陣しゅつじんし、ヤリ半蔵はんざうにおとらない功名を立てようと、りきんでいた。しかし、近ごろは將軍家のご威光いこうが行き渡わたって、世の中はしずかだった。こうしずかでは、せつかくのさし物も、さして出るわけにはいかなかった。じつを言うと、彼かれはいくさがなくても、それをさして出て歩きたいくらいなのだが、まさか、へいぜい、そんなまねもできなかつた。だが、さし物はさしていなくても、十蔵の背なかには、いつも「不借身命」の旗がひるがえっていた。どんな場合でも、彼はそのさし物をしよっているつもりでふるまっていた。

だから、十蔵は常にそり返っていた。恐れおそや驚おどろきというものを、昔から知らない彼は、地ひびきを立てて、世の中をドシン、ドシン、大またに歩いていた。彼はいい気持ちだった。何もかも、むしろようにうれしくてたまらない、という気持ちだった。

ところが、その年の秋のことである。十蔵は、同役のひとりから、自分について、思いもかけないうわさを聞いた。「惜おしいことに、あの男はまだわかっていない。」

柳生又右衛門やぎゆうまたえもんが、こんなことばを漏もらしていたというのである。はじめ十蔵は、さようなことをまに受けなかつた。たれか中傷する者のしわざだと思っていた。しかし、それは中傷ではなかつた。事実、又右衛門がそう言っているらしかった。十蔵はむつとした。ほかのことならともかく、武道がわかつていないと言われては、武士の一分いちぶんが立たない。自分としては、近ごろ一段と腹がすわってきたつもりでいるのに、言うことにことを欠いて、わかっていないとは何ごとだ。そんなことを言うからには、たとい、かみのお手なおし役であろうとも、捨ててはおけない。果たして、柳生どのがそういうことを放言したのか、とくと実否をただしたうえ、事と次第しだいによつては、果たし合いもしかねまじきけんまくで、十蔵は虎之口とらぬのくちの、柳生のやしきへ押しかけて行った。

それは、小雨こさめのそぼふる、寒い、昼さがりだった。柳生又右衛門はいろりに前ごごみになって、灰の中にクリをいけていた。そのころの裁ち方である、そでだけの詰つまった、ゆきの短い羽おりは、五十の坂を越こした彼には、ややほだ寒く感ずるのか、ときどき、そで口のところを気にしているようだった。そこへ召使めしつかいはいつてきて、石谷いしが

十蔵がたずねてきたことを告げた。

「ほう、たずねてまいったか。」

又右衛門は水ばなをかみながら、いくぶん予期していたような口ぶりで、召使いのほうを見かえった。

「では、こう申すがよい。所労で引きこもっておりませんが、何か火急のご用事でござりましょうか、と一応、たずねてみるがいい。」

「はあ。」

「ぜひとも会いたいと申したら、ここへお通し申せ。」

召使いは引き下がると、まもなく十蔵を案内してきた。

「お引きこもりの中を、押して推参いたし、恐縮に存じますが、ちと、おうかがいいたしたき儀のござつて……。」「

十蔵の語気は、どこともなく、とがっていた。

「これはこれは、ようこそお越しなされた。かような見ぐるしい席で、粗略の段は、お許し願いたい。——石谷どの、こちらへ進まれえ。雨天のせいか、本日は、ちと、冷えますな。」

「いや、それがしは、さしたることもございませぬ。——さて、さっそくながら、道路の風説によれば、ご師範どには、拙者、武道をわきまえぬと、お漏らしになりし

やに聞き及びますが、さようのこと、しかと、おおせになりましたか、うけたまわりとう存じます。」

「はははは、何ごとかと存じたら、そのようなことでござるか。——いや、それは、それは……。」「

又右衛門は笑いながら軽く答えたが、十蔵にはそれがいつそうしやくにさわった。こちらは真剣に問うているのに、笑いにまぎらして、安くあしらうとは何ごとだ。それならこつちにも考えがあるぞと、彼は肩をいからして、ひとひざ、前へ乗り出そうとしたとき、パーンと鉄砲のような音がして、とつぜん、丸いものが彼の前に飛んできた。それがなんであるか、十蔵はもとより知らなかった。けれども、彼は空に飛んだものを、すばやく右の手でとらえた。手のひらがつかんだときのように、ちりちり熱かったが、彼は色にも見せないで、ぐっと又右衛門をにらみつけた。「何をするのだ。小細工はよせ。こんなことで驚く拙者ではないのだぞ。」彼の目は、そうさけんでいるようだった。

「これはとんだそそろを。ただ今、クリを焼いておりましたのでな——。」

又右衛門は火ばしを取って、ほかのクリを掘り出した。

十蔵はなんとも言わなかった。きりつと口を結んだまま、「どうだ。これでも武道のわきまえないと言うのか。」と言わんばかりの顔をして、宙にのぼした右うでを、

わざとつっぱたなり、じつと主人をにらみ続けていた。

「いや、お見ごと。お見ごと。おうでまえのほど、いつもながらあざやかなことござる。——しかし、石谷どの。ただ今、飛んだのは、クリだからよいようなもの、もし、それが鉄砲の玉であつたらどうなさるの。」

又右衛門は軽くすわり直して、十蔵の方を見まもった。

「なんでござると！」

十蔵はつかんでいた焼きグリを、もう一度、ぎゅつとつかみかえした。こげたクリの皮が、手のひらの中で、ザリツといった。

「いや、鉄砲の玉であつたら、そのもとはどうなさると、おたずね申したのじゃ。」

「……………」

「やはり不惜身命で押し通しなさるか。」

「……………」

「いかに気づよいそのもとも、鉄砲玉であつたら、よも手づかみにはなさるまい。

——不惜身命は結構じゃが、時によりけりではござるまいかの。」

又右衛門はのぞくように十蔵を見あげた。こぶしの中で、粉になった黒いクリの皮が、十蔵のはかまの上に少しこぼれた。

「われらが惜しいと申したのは、ただそれだけのことじゃ。そのもとは真剣を売り物

にする浪人ろうにんがあると、すぐ、そやつと果たし合いをやる。仕合しあひをおおせつかると、ほん身のヤリをもつてなぞと願ひ出る。してまた、今のようにはねると、なんの分別もなしに、すぐとらえる。そのおうでまえは見ごとじゃが、しかし、いささか、かろがろしいきらいはござらぬかの。さいわい、今までは、さしたることもなかつたら、よいようなものの、万一、まちがいでも引き起こしたらどうなさる。いざという場合、そのもとは、何をもつて、ご奉公ほうこうをなされるご所存しよぜんなのだ。」

「……………」

「いや、お若い。お若い。まだ武道のおわきまえがたらぬと申したのは、そのことござる。しかし、われらの申したことが腹にすえかねたとあらば、やむをえませぬ。そのもとのお気のすむようになされたがよい。」

十蔵は答えなかつた。

小雨がパラパラと縁えんがわをぬらした。

又右衛門は続けた。

「いのち惜しむ。そのような人間は、もとより武士の列にははいりませぬ。心ある武士なら、申すまでもなく、不惜身命でなくてはなりません。さりながら、不惜身命だけでは、まだ『上ノ上』とはまいりませぬ。せいぜい『中ノ上』『上ノ下』でござる。まことの勇者は、もそつといのちを惜しみます。常づねのいのちを惜しんでこそ、

一大事の場合に、はじめて不惜身命の働きができるものではござりますまいか。人間一生のうち、いのちを惜しまぬというような場合は、そうたびたびあるものではござらぬ。まず、へいぜいは、いのちを惜しむことが大切ではありませぬかの。そのものように、年中『不惜身命』でりきんでは、たとえば、つるを張りっぱなしにいたしておくようなもので、かえって、弓がたるんでしましますわい。どうじゃな、石谷どの。『不惜身命』のさし物は、ちと、おろしておおきになつては。さようなものを明け暮れ背なかにしよつていては、肩がこつてなりませぬぞ。」

又右衛門は、なお、ねんごろに説いていたが、十蔵のあたまには、そうこまかには、はいらなかつた。ただ彼の胸にははつきり焼きつけられたことは、うえ様のご指南番だけあつて、なるほど、又右衛門という人は大きな人物だ。自分はいっぱし武道がわかっているつもりでいたが、この人の前に出ては、まるでだめだ。赤んぼうと同じようなものだと思つたことだつた。彼はここへ押しかけてきたことには、すばらしい勢いだつたが、会つているうちに、だんだん、あたまがさがつていった。

そして、はいつてきたときのようなけんまくは、いつのまにか、全く消えてしまつた。彼は自分の未熟なことがひしひしと身にしてみた。彼はすなおにそれを認め、今日の不作法を深くわびて、又右衛門のもとを去つた。

柳生のやしきは、外堀そとぼりりのそばそばの土橋どばしのたもとにあつた。十蔵は門を出ると、心がうつろになつたせいとか、ついふらふらと前の土橋を渡つてしまつた。供の者に注意されて、彼ははじめで、方角ちがいに歩いていくことに気がついた。

空はくもつていたが、雨はやんでいた。十蔵は堀ばたに立つて、しばらく、動かない水を見つめていた。

繪入り『ふしやくしんみやう』内題―改訂 不惜身命―山本有三作、創元社版

繪 山村耕花

書 安藤芳瑞

一

ドーン。

ドーン。

遠くでせこの打つてゐるせこ太鼓の音も、みぞれにしめつて、なんとなく活気がなかつた。